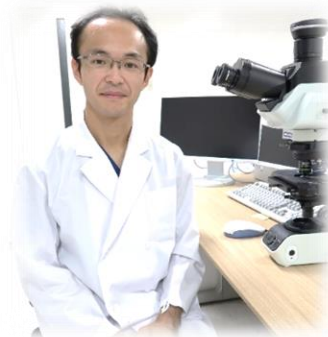




退職のごあいさつ

辻賢太郎 医師



9月末をもって自治医大を退職することになりました。2016年にジュニアレジデントとして入職してから7年半、自治医大の皆様には大変お世話になりました。至らないことばかりでご迷惑をお掛けすることも多々ありましたが、スタッフの皆様の温かいご指導とご協力に支えられ、お陰様で今日まで仕事を続けることができました。

2018年3月の学内広報に寄せた「初期研修を振り返って」の文章の中で、不遜ながら、私が思う自治医大の良さの一つとして多様性とそれを受け入れる寛容さを挙げました。病理診断部の一員となり5年半が経つ今、改めてその有難みを

噛み締めています。様々な背景や専門性を持った指導医の先生方に、同じ顕微鏡の視野を共有しながら日常的に教を請うことのできる環境で仕事をさせて頂いたのは、本当に贅沢で幸せなことでした。振り返れば絶えず自分の周りのことだけで精一杯で、手を差し伸べて頂いてばかりでしたがそんな私に温かな居場所を与えて頂いたことにも心から感謝の意を表します。

人にも環境にも恵まれた自治医大を離れることは名残惜しくもありますが、学ばせて頂いた数々のことを胸に刻んでこれからも職務に励みたいと思います。

10月からは京都大学医学部附属病院病理診断科で勤務する予定です。近隣にお立ち寄りの際は是非ご連絡を頂ければ幸いです。

これまでお世話になった病理学講座・病理診断部の皆様、臨床各科の皆様、大学・病院職員の皆様に改めて深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

佐藤沙弥香 技師



11月をもって退職することになりました、臨床検査技師の佐藤です。

私の社会人人生はここから始まり、馴染みのない栃木県での生活に不安を感じていましたが、気がつくと6年半。優しい上司と先生方、かわいい後輩、そして最高の同期に出会いました。

皆さまのおかげで公私ともに非常に充実した日々を送ることができました。また、大学の様々な施設(ジム・プール・図書館など)も利用させていただきましたので、この場を借りてお礼申し上げます。

病理診断部での経験は私の誇りです。ご指導いただきありがとうございました。ここで学んだ技術や知識を今後の人生の武器として新たな道へと進んで行きたいと思っております。

最後になりますが、この6年半で携わったすべての方々に心より感謝いたします。

発行元：病理診断部（内線2257）
編集：岡田啓祐、茂呂実咲
織田智博、二階堂貴章、飛田野清美、福嶋敬宜

業務内容変更のお知らせ

院内JUMPメールでもお知らせしておりますが、10月1日より腎蛍光抗体法のパネル数が7種から6種(C4cを除外)に変更になりました。理由は①使用している自動染色装置に対応する試薬を保有していないこと、②腎生検病理診断取扱い規約において必要とされる抗体パネル内に含まれていないこと、の2点です。これらにより、作業の効率化とコストダウンが期待されます。ただし、要望があった場合には用手法で染色を実施いたします。

変更前：IgG, IgM, IgA, C3c, C1q, C4c, Fibrinogen (7種)



変更後：IgG, IgM, IgA, C3c, C1q, Fibrinogen (6種)

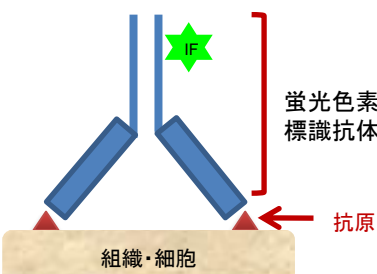
コラム：蛍光抗体法ってなに！？

蛍光抗体法は、蛍光色素を標識した抗体を用いて、組織に沈着した免疫複合体の局在を可視化する方法です。病理検査では、主に腎生検・皮膚生検を対象に行っています。陽性となる抗体の種類によって、ある程度病変の推測が可能なのが特徴です。

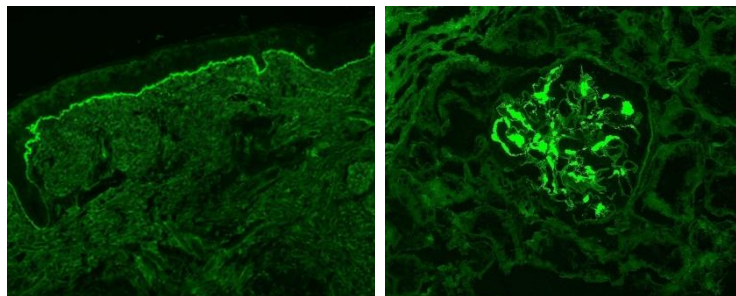
当院で行う蛍光抗体法は、凍結切片を用いるため、固定や脱水・パラフィン置換操作などの数々の手順が不要のため、いち早く検査結果を病理医に報告することができます。

蛍光抗体法(直接法)の原理

蛍光顕微鏡ではこのように見えています！きれい！



IF : 蛍光色素



皮膚：類天疱瘡
(IgGが線状に陽性)

腎臓：IgA腎症
(IgAがメサンギウム域に陽性)